

# 石畑の山車

## 瑞穂町有形民俗文化財

所在地：瑞穂町石畑 1848 番地



石畑地区は、近世より東西2地区に区分されるようになり、西半分は「石畑上<sup>かみ</sup>」、東半分は「石畑下<sup>しも</sup>」と呼ばれていました。この山車は、石畑上の山車で、明治12年(1879)頃に石畑上の大工、吉岡助右衛門<sup>すけえもん</sup>が同地区にある御嶽神社の檼<sup>けやき</sup>を使って建造したとの伝承があります。石畑の山車の様式は殿ヶ谷のそれとほぼ同じで、一本柱<sup>たんそうから</sup>単層唐破風屋根人形山車<sup>はり</sup>、梁間一間<sup>けたゆき</sup>、桁行二間造りとなっています。異なる点は、一本柱が「中建て方式」で建てられている点で、これは屋根に設けられた穴から一本柱を差し込む方式であり、類例が少ないものです。

脇障子と胴羽目には中国元朝時代の書物である「二十四孝<sup>にじゅうしこう</sup>」を題材とした人物が彫られ、虹梁<sup>こうりょう</sup>上には「牡丹」、妻飾りには「乙姫と浦島」など、見事な彫刻が施されています。これらの作品は江戸時代後期から明治期にわたり活躍した「彫徳<sup>ちやうとく</sup>」とよばれる江戸日本橋在住の彫刻師によるものと伝えられています。